

佳作

本当におめでとう

高知県 土佐女子中学校二年 河合 夏子

舞台は四国のバレエコンクールの表彰式である。私と姉は、ともにこのコンクールに出場し、私はジュニアBという部門の六位が決定し、すでに壇上に呼ばれていた。姉はジュニアA部門に出場しており、観客席で発表を待っていた。四歳年上の姉は数年前からこのコンクールで入賞を続けており、毎年のように期待されていたが、いつも直前の肝心なときにスランプに陥り、期待はずれの結果に終わっていた。ジュニアA第二位の発表だ。呼ばれたエントリーナンバーは姉のものではない。ほっとする一方で、まさかこのまま呼ばれないのではないかとという不安感に駆られ、自然と汗ばんでくるのを感じていた。

毎日レッスンの連続だった。晴れの日も、雨の日も、来る日も来る日もレッスンで、それは中間テスト期間も期末テスト期間も、実力テストの日も関係なく続いた。姉も私もほとんど徹夜で学校に行き、テストを受け、家に帰って仮眠をとり、レッスンに向かったことも少なくなかった。私は中学二年生だが、高校三年生である姉は、このような生活を、もう五年以上も続けている。母はこんな私たちをよくサポートしてくれ、自分もバレエ経験者であるためよく理解し、サポートしてくれる反面、期待されていることもひしひしと伝わってくる。「頑張らないといけない」口には出さなくても、姉と私の共通した気持ちだった。

去年のコンクール、姉は思うような結果が出せなかった。私は入賞すら出来なかった。何がいけなかったのか。解っているよ

うで、実ははっきりしない。テクニクは完璧でも全体の雰囲気や堅いと良くない。多少失敗しても、審査員の琴線に響くものがあれば、それなりの評価をもらえたりする。テクニクと芸術、両方を高いレベルに仕上げないことには、望む結果は期待できない。

二位の人の表彰が終わわり、私たちの列にいった。アナウンスの声が会場に響いた。「それでは、いよいよ第一位の発表です。第一位はエントリーナンバー三十四番。」

「姉の番号だ」ゆっくりと観客席から壇上に向かって歩いてくる姉の姿を、私はずっと眼で追っていた。姉が壇上に上がり、客席に一礼した時、私の中にこみ上げてくるものがあつた。自然と涙があふれた。私は笑いながら泣いていた。「本当によかった」数ヶ月してコンクールのDVDが届いた。家族で見た。コンクールを見に行けなかった父は涙ぐんでいたが、私の目には欠点や修正点ばかりが目についた。もはや涙を流すような代物では無くなっていたのだ。姉も同じで、すでにその先を見据えているようでした。心を揺さぶる感動、それは一つのことを成しとげたとき、一度だけ味わうことのできるごほうびだと思う。私も姉も、次の感動を期待して、これからもレッスンにはげむだろう。